

豊かな生命あふれる草原を

秋吉台草原ふれあいプロジェクト

平成 22 年度（2010）報告書概要版

活動の目的

西日本有数のカルスト台地秋吉台の上には、さまざまな動植物が生息・生育する広大なネザサ草原が広がっています。毎年早春の山焼きで守られているこの草原では、草を農業利用するためにさかんに草刈りが行われていました。しかし、化学肥料や化石燃料の普及とともに草の利用は少なくなり、草原は生活とは切り離されたものとなりました。現在では、山焼きで燃えにくい場所を中心にヤブ化し、また周囲から森林化がすすみ草原の面積が小さくなりつつあります。私たちは、秋吉台の草原について知り、考え、地元を応援しながら、豊かな生命あふれる草原を守っていくことをめざして活動を始めました。

活動報告

活動 3 年目の平成 22 年度は、昨年よりも多い 5 回の草刈り作業を行いました。その中でも、遊歩道沿いの草刈り整備は、観光と保全の両立を実現するため今年初めて取り組んだものです。小学生の草刈り体験学習も実施できました。また、草刈り跡での観察会や草原の再生に関して外部講師を招いての現地学習会も行い、調査成果の報告や新しい知識・情報の普及につとめました。昨年にひきつづき企業のボランティア活動の受入、連合山口の火道切りボランティア作業との連携も進みました。燃え残り整備である追加の山焼きも無事おこなうことができ、草原景観の保全にも貢献できました。本年度はのべ 250 名の方にご参加いただきました。



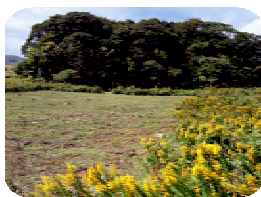
草丈の高い草原を草刈り



農業環境技術研究所・平舘氏の講演



花の多い遊歩道
が実現した



追加の山焼きでは
燃えにくい帽子を
そろえた



秋吉台草原ふれあいプロジェクト

<http://akiyoshidai.org/>

事務局：秋吉台エコ・ミュージアム

〒754-0302 山口県美祢市美東町赤

Tel&Fax:08396-2-2622

E-mail: staff@akiyoshidai.org

○ お花畑プロジェクト

梅雨明けごろに草刈りをすることで地表面近くまで届く光の量が増え、秋の花の数は増えます。草の量がおさえられることで開花する種類が増えるだけではなく、そこに出現するすべての種数も増えます（図 1）。ところが、その後草刈りをしなければ2年後には花の数は半減（図 2）、咲く種類も減ってしまい（図 3）、もとの状況にもどってしまいうことがわかりました。

秋の観察会では、草刈り跡での開花状況を確認してもらい、草原性植物が生育する環境を守る意義を説明しました。同時に、山口むしの会からもチョウの保全についてのお話がありました。草原で演奏されたオカリナの音色も草原にぴったりで参加者からは大きな拍手がおきました。午後のクラフトでは、草を使った紙すきや草原から駆除したセイタカアワダチソウを使った草木染めなどで、草原に親しむ体験をしてもらいました。

今年も農家に草を使ってもらい資源の循環につとめました。その農家のナシや、ご好意で提供いただいたサトイモもお土産に好評でした。

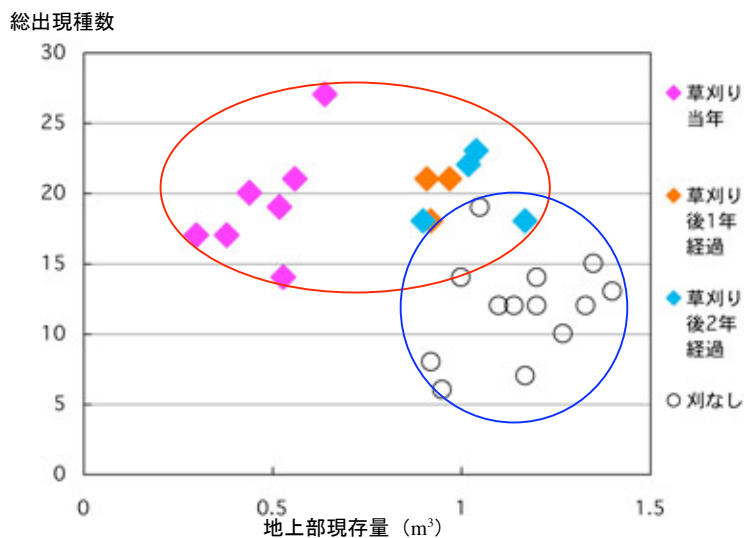


図 1. 草の量と出現種数との関係

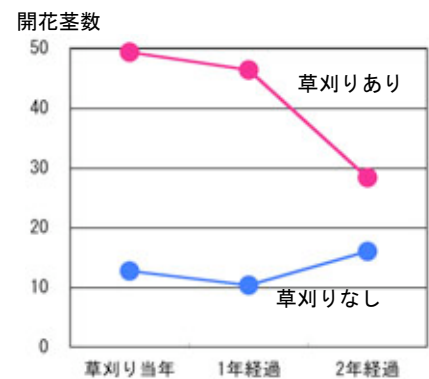


図 2. 草刈り後の経過年数と開花茎数の変化

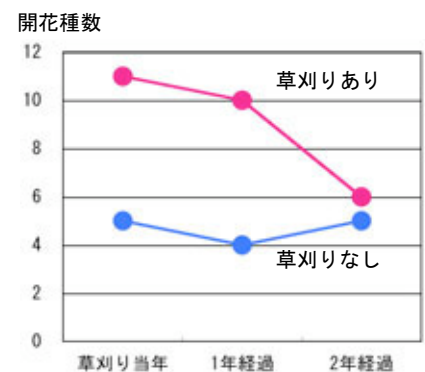


図 3. 草刈り後の経過年数と開花種数の変化



休憩時は談笑



セイタカアワダチソウの染め物



草原で聴くオカリナは格別



自分の家の牛にやる草だと思えば力が入る



現地で草刈りの効果を説明

○ 草原の復元プロジェクト

秋吉台の重要な観光スポットである長者ヶ森の前には以前はクリ園で今はヤブになった場所があります。外来植物の駆除と草原の再生のため、草刈りと山焼き後の燃え残り整備を続けています。



現在、草刈り跡では外来植物や畑地雑草が繁茂していますが、草刈りを続け刈草を除去した場所では草原性植物が回復しつつあります（図 4）。また、草を刈って持ちだした場所はセイタカアワダチソウの量が減りつつあります（図 5）。

追加の山焼きでは、長者ヶ森近くの別の廃クリ園などで燃え残り整備を行いました。

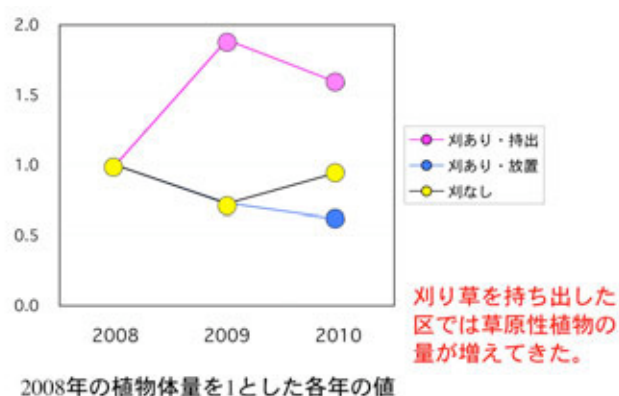


図 4. 草原性植物の回復状況

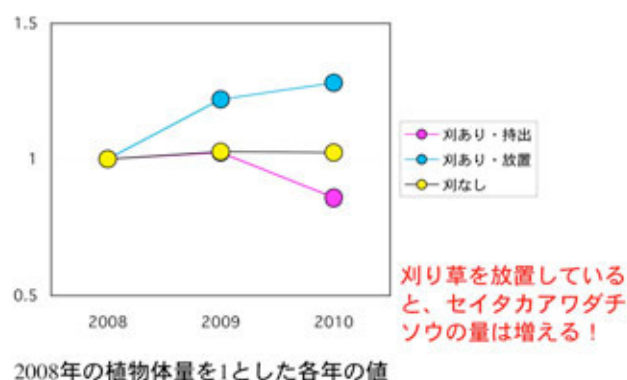
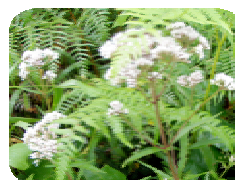
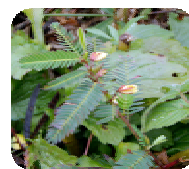


図 5. セイタカアワダチソウの現存量の推移



長者ヶ森付近の廃クリ園と帰水にて燃え残り整備をおこなった



セイタカアワダチソウの下にネザサが回復しつつある

○ 山焼き応援プロジェクト

山焼きの延焼を防ぐための防火帯（火道）で、夏に草を刈った年は秋の草の量が抑えられ、冬本番の作業が非常に楽になりました。しかし、その後草刈りがないと、2年後には刈らない場合の9割程度にまで回復しており、草刈りの効果は持続しないことがわかりました。

草を持ち出しやすい場所では、冬の火道切り本番の補助作業として夏の草刈りを考えてもよいかもしれません。

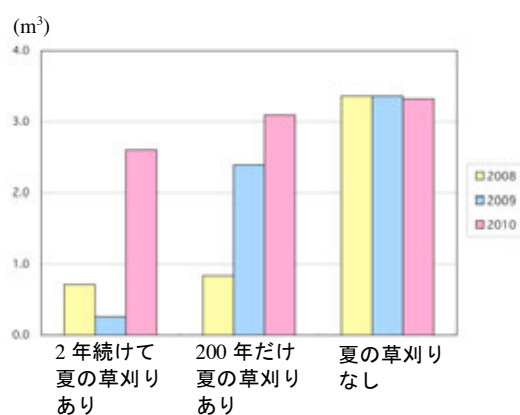


図 6. 火道における草刈りと地上部現存量の関係

○ 遊歩道にお花畑づくり

遊歩道の草刈りはいつもは夏や初秋に行われ刈り草は放置されるため、歩道沿いにはほとんど花が見られません。

そこで、今回は草刈り時期を7月に早め、刈り草を全て持ち出すことで、遊歩道沿いにも花が多くなるように整備をしました。その結果、通常の草原の1.5倍の花が咲き、その中には、草原性の絶滅危惧種も含まれていました。刈り草は農家に引き取られました。

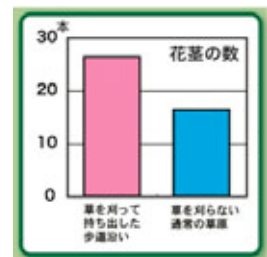
花が多くなった歩道はウォーキング参加者にも好評でした。「観光と保全の両立」の一事例として有効な結果を残せました。



企業のボランティア活動で草刈り



第7回秋吉台カルストウォークの様子 (10/24)



○ 連合山口の火道切りボランティアとの連携

昨年度は火道切り作業時の刈り草を1人1束ずつ持って降りてもらい、ドリーネ畑で野草堆肥の製造に使うことにしました。堆肥は順調に発酵していますが、冬場の水分の少ない草なので時間がかかります。

そこで、今年は昨年の堆肥を使ってダイコンを育て、ボランティア作業時のお昼ご飯とおみやげに提供しました。

作業参加者 500 人のうち半数の方がドリーネ畑で実際にダイコンを抜いていかれ、「ただボランティア作業するだけではないのいい」と、特に若い方々に好評でした。秋吉台の草原を守ってくださることに感謝の気持ちを伝え、また草を資源として利用できることを実感してもらうよい機会になりました。



こういったボランティアの方々は、「責任あるツーリズム」の実践者として草原保全の担い手になると期待されます。今後もよい関係を築いていけたらと思います。